

小学校外国語科・外国語活動におけるCLILの充実 —ICTの活用を通して—

大森有希子・遠藤勇太・檜木航平・白間勇輔・遠藤真央*, ホール・ジェームズ**

*岩手大学教育学部附属小学校, **岩手大学教育学部

(令和4年3月14日受理)

1. はじめに

本校では4年前から、CLILの単元開発について研究を進めてきた。CLILとは、Contents and Language Integrated Learningの略で、内容言語統合型学習のことである。この学習方法は、教科内容と英語運用能力の両方を統合させた学びである。また、暗記や理解に偏ることのないバランスのとれた多様な学習活動を行うことができる。

我々は、CLILが施行されている学習指導要領で外国語科・外国語活動の授業づくりにおいて重要視されている「目的・場面・状況の設定」に、大きく資することができる学習方法だと考える。

本プロジェクトは、その多様な学びの展開が期待できるCLILを用いて、外国語科・外国語活動の単元を開発していくものである。

そこで、今次研究では、4つのCを基に、児童の学びに対する意欲の向上や会話スキルの向上を促す教科横断的な単元を開発することを目的とする。

2. 方法

(1) 研究計画

- 6月 学部とのカンファレンス
- 7月～2月 令和2年度授業研究(実践と開発)
- 10月 学部とのカンファレンス
- 12月 外国語活動授業研究(5年生)
- 2月 外国語科授業研究(4年生)

(2) 研究方法

CLILを用いた授業に基づきICTの活用と実践を重点として、本プロジェクトを推進した。

外国語科・外国語活動の授業において、ICTは児童の学習にどのような影響を与えるのか学習の様子を単元通して記録し、児童の学びの変容を見取っ

ていく。

外国語科・外国語活動の授業の中に組み込む教科は、前学年までの既習事項や今後学年が上がると詳しく学習していくであろう未修内容も違和感なく取り入れることとし、その有効性について検証していく。

3. 結果

(1) 本校のCLILについて

CLIL(Content and Language Integrated Learning:内容言語統合型学習)とは、教科教育(数学,社会,理科等)と外国語教育の両方を統合させながら学ぶことができる学習方法である。CLILは児童を中心に据え、暗記に偏ることのないバランスのとれた多様な学習活動を行うことが可能である。

本校では小学校段階を考慮して以下のように一昨年よりCLILの4つのCを捉え直して、研究を進めている。

①content

外国語活動及び外国語活動の学びにおいて、他教科と関連させた内容であること。

②communication

学習者同士のコミュニケーション活動が学びの文脈に位置づいていること位置づいていること。

③cognition

学習者の思考に沿うように、自由度のある英語運用を行うこと。

④culture

自由度のある英語運用を支える教師の集団作り、学習者のコミュニティーのこと。

①content について

他教科の既習内容を外国語科・外国語活動の単元計画の中に盛り込むことで、外国語の学習をより充実させることができるように考えた。

②communication について

外国語教育の中で、授業の目標が理解させたい外国語言語項目を対象にする傾向が見られる。そうではなく、ある教科の領域を理解しながら、児童間でのやりとりができるようにする。

③cognition について

外国語活動及び外国語における言語活動では、定型表現のやりとりに加え、その場に応じて自由度のある、オーセンティックなやりとりができるとよい。CLIL の学習計画段階では、学習活動が要求する論理的な思考が特定されている、例として、「分類」、「定義」、「描写」、「説明」、「探求」、「情報」を挙げることができる。これらの論理的な思考を学習計画に設定することで児童は目的をもって自由度のあるやりとりを行うことができる。

④culture について

児童は、外国語科の学習において英語を用いてやりとりを行うコミュニティーに属している。さらに、それは現代のグローバル社会でも同じコミュニティーに属していると言える。児童自身が外国語を使ってやりとりを行うコミュニティーに属しているという自覚をもつことが大切だと考える。

CLIL の指導に当たって、池田が(2016, p. 34)以下のような選択肢を紹介している。CLIL という指導法は柔軟性があり、選択肢の調整で、多数の教育コンテキストで実施可能だと考えられる。



本校はこの選択肢に基づいて、以下のように CLIL を実施している。

目的 : Soft CLIL

本校では、CLIL を用いて学習を展開する目的を、「英語教育」とする。科目教育を目的としまうと第二言語である英語で、他教科の授業を展開し、理解させ、評価することになる。これでは、指導者の英語力も必要であり、また児童も英語を理解していることが前提となる。そうではなく、他教科と統合しながら英語運用をメインに学習を進めることが小学校段階では効果的だと感じる。

頻度・回数 : Light CLIL

頻度は、学期に1～2単元を目標として行う。カリキュラムマネジメントの面で工夫が必要であり、他教科の理解もままならないまま英語と統合してしまうのは、児童にとって有効ではないと考えたからである。児童の混乱を防ぐため、原則として、既習事項と組み合わせることとする。

比率 : Partial CLIL

単元全てを他教科と統合して行うことができるのは、例えば総合学習など汎用性の高い教科では可能だと考える。しかし、多くの場合、表現に慣れ親しむ時間が必要だったり、やりとりの経験を積ませることが必要だったり毎時間教科統合するのは難しい。単元の中の1～2時間を教科統合するのが望ましいと考える。

使用言語 : Bilingual CLIL

All English の授業が理想ではあるが、知識の少ない小学生には厳しいものがある。全員を同じ土台に乗せた上で言語活動ができるよう活動のルールの説明等は日本語で行い、全員が不安感を抱くことなく活動に入れるようにする。

本校の研究方針に基づいたこれら4つのCを意識して学習内容を検討した。

(2) ICT を活用した教科横断的な学習の開発

ICT を活用する際、次の①～③の点に留意することを通して、児童の学びに対する意欲の向上や会話スキルの向上を促す学びの構想ができることが明らかになった。

①単元のゴールの姿（目標）の提示

児童の意欲が高まるようなモデリング動画を単元の最初の時間に示す。この動画は、上級生や教員に協力してもらい、単元で身に付けさせたい表現を使った内容にする。そのモデリングをもとに本単元の自己の目標を設定する。その難易度は高すぎないことが原則であるが、容易なものであると目的意識は薄れてしまう。数ターン続く英語でのやり取りを伴う言語活動がゴールの姿となるとよい。

②ゴールの姿を達成するために効果的な単元計画や教科領域を決定（content）

ゴールに行きつくために、必要な知識及び技能を考える。また、ゴールの姿の特性に合わせた他教科の学びの視点を取り入れて考えていく必要がある。例えば、「〇〇さんのためにケーキをつくろう」であると色のバランスを考えたいと感じる児童が多い。そうすると図画工作科の学びを生かす必要がある。

③ICT の効果的な使用場面構想

ア 自由度のある英語運用を行うために、思考を伴った言語活動を行う。その際、教師のモデリングや仲間とのシェアリングに ICT を活用する。

イ ICT に録画された自分の姿を見て、外国語を用いて楽しくやり取りを行う学習集団に属しているという所属感をもてるようにする。

ウ 初段階から単元末まで自己のやり取りを取り溜め、自己の成長を自覚する。

(3) 実践

【单元名】 第4学年

Junior Sunshine 4
いま、何時？
What time is it?

【①単元のゴールの姿（目標）の提示】

本校6学年の抽出児童に協力を依頼し、モデリング動画を撮影した。その際、どんな場面と状況で会話が行われているかが視聴者側にはっきり伝わるように作成した。保健体育科の視点を加え、生活習慣を整えるという視点で学習を進めていく。動画の会話は以下の通りである。

母親役児童: Hey! It's time to do homework.
子供役児童 A: Really? I want to play more.
子供役児童 B: What time is it now?
母親役児童: It's 4:30 p.m.
子供役児童 C: No! Let's play.
子供役児童: Yeah!
母親役児童: STOP! It's homework time!
子供役児童: Oh, no.

このように、複数人グループにより、単元で身に付けたい表現を使用してやり取りを行った。これをはじめて見た4年生児童から、「6年生のようにスムーズに会話できるようになりたい。」「英語で会話しているけど、日本語で話している時のようだった。」「早く自分もやってみたい。」という感想が出た。

【②ゴールの姿を達成するために効果的な単元計画や教科領域を決定（content）】

【③ICT の効果的な使用場面構想】

モデリング動画を見て、児童は「What time is it?」の表現を使ってグループでやり取りを行うためにどのような学習を積み重ねていきたいかを話し合った。そうした結果以下のような学習計画が出来上がった。

また、毎時間 ICT 機器にやり取りの様子を撮り溜めた。



自己のやり取りを ICT 機器を使って振り返る様子

【学習計画】

時	目標◆・主な活動○・ICTの活用■
1	◆「今何時?」「〇時です。」を表す言い方を身に付ける。 ○ALT と HRT の会話を聞いて内容の概要を把握する。 ○Mr. Wolf ゲームで言い方に慣れ親しむ。
2	◆簡単なやり取りに挑戦する。 ○ “What time is it?” “It’ s 〇〇.” という定型文のやり取りをペアで行う。 ■やり取りの様子を iPad で撮影し、良い点や改善点を話し合う。
3	◆表現に合う目的・場面、状況考え、やり取りの内容を決めて、やり取りに挑戦する。
4	○やり取りの中に既習事項を取り入れられるようにする。 ○保健体育科との学習と関連を意識できるようにする。 ○シェアリングを行い、やり取りの改善点を探して修正する。 ■やり取りの様子を iPad で撮影し、良い点や改善点を話し合う。
5	◆グループ毎に発表する。 ○他チームの会話がどのような場面で行われているか見取る。 ■発表の様子を教師が iPad で記録し、学習後今まで撮り溜めたものと比べる。

【単元名】 第5学年

Junior Sunshine5 Lesson8
「ランチメニュー」を考えよう
What would you like?

【①単元のゴールの姿(目標)の提示】

本校職員に協力を依頼し、モデリング動画を撮影した。その際、どんな場面と状況で会話が行われているかが視聴者側にはっきり伝わるように作成した。動画の会話は以下の通りである。

~Shirama’ s resutaurant~ 客① : Oh... I’ m hungry. 客② : Me, too. 店員 : Welcome to my restaurant. What would you like? 客① : I’ d like tomato spaghetti. 客② : I’ d like hamburger and juice, please.

店員 : Thank you.

~店員が立ち去る~

客② : Oh, do you like spaghetti?

客① : Yes. I like tomato. You too?

客② : Oh, me, too.

【②ゴールの姿を達成するために効果的な単元計画や教科領域を決定 (content)】

【③ICTの効果的な使用場面構想】

モデリング動画を見て、児童は「What would you like?」「I’ d like ~.」の表現を使ってグループでやり取りを行うためにどのような学習を積み重ねていきたいかを話し合った。そうした結果以下のような学習計画が出来上がった。

また、毎時間 ICT 機器にやり取りの様子を撮り溜めた。

【学習計画】

時	目標◆・活動○・ICTの活用■
1	◆単元のゴールを知り、活動の見直しをもつ。 ○モデルを提示し、単元のゴールを決める。
	英語を使って、レストランで注文してみよう! ・ レストランで使用する表現を知る。 What would you like~/I’ d like~. ○表現を使ったやり取りに挑戦する。 ■やり取りの様子を iPad で撮影し、良い点や改善点を話し合う。
2 3 4	◆場面設定を行い、レストランでの注文や前後のやり取りに取り組む。 ○様々な食べ物の表現を知る。 ○場面設定と前後のやり取りの内容を考える。 ○家庭科で得た栄養素の知識を利用して栄養バランスにも気をつけた注文ができるようにする。 ■やり取りの様子を iPad で撮影し、良い点や改善点を話し合う。
	◆学級内でやり取りを発表する。 ○創り上げてきたやり取りを発表し合う。 ・他の班の発表の様子を見て、学んだことについて班ごとに話し合う。 ・ALT の先生向けのやり取りの練習を班ごとに行う。
6	◆「レストランを想定した」ができる。 ○ALT の先生にやり取りを見てもらう。 ・班ごとに発表する。 ・互いのやり取りを評価し合う。 ■発表の様子を教師が iPad で記録し、学習後今まで撮り溜めたものと比べる。

4. 考察

CLIL を使用した学習と ICT の活用を組み合わせることで、児童の意欲増進が感じられた。また、オーセンティックなやり取りに近づけることが出来たと考える。

これまで、教科書の会話を忠実に再現したり、表現を使ったゲーム等を行ったりしながら、最後の言語活動に向けて学びを進めていく単元計画が多かった。その中で、他教科領域の知識を生かせるような視点を与え、英語が苦手な児童も進んで取り組めるように学習を行ってきた。そのような学習にも様々な成果が見られたが、ICT の活用を入れることでさらに学びが充実した。

自分がどのような表情、声色、身振り手振りで相手と会話しているのか、日常生活の会話でその姿を見る機会はほぼないと言っていいだろう。しかし、映像を使うと正しい発音で自分が会話できているか文法は合っているかを確認することはもちろん、普段のコミュニケーションの仕草や癖まで見ることができる。つまり、ICT 機器使用の最大の魅力は、自己の姿を客観的に見ることができると感じる。これは、学習指導要領における「コミュニケーションの素地や基礎を養うこと」に大きく関わることだと感じる。また、自己のやり取りを客観的に見ることは、成功体験の積み重ねにつながると感じる。他教科と違い、インプットした知識技能を試すようなペーパーテストを導入していない。そのため、これまでは、自分がどこまで出来るようになったのか自覚することが難しい教科であった。しかし、一つの単元の学びの中でのやり取りが動画で残っていると前時との違いを明確に感じられるし、成長を自覚することができる。学年末には一つの機器に一年分の動画が収められている。

このことは、コミュニケーションの面白さを感じる大きなきっかけとなるだろう。また、苦手な児童もスモールステップの段階で細かに動画を振り返られるので、一単位時間の目標も明確にもつことができると考えられる。

5. まとめ

本研究を通して、次のことが示唆されている。今後、さらにデータを集めて検証する。

- ・教科横断的な単元を構成に加え、ICT の活用をすることで、児童の学習意欲の向上につながる。
- ・第一時にオリジナル映像を用いたモデリングすることで児童は、学びの文脈の中で他教科の視点を持ちながら、言語活動の目的をもつことができる。
- ・ICT を活用して、自己の学びを振り返る機会を多々与えることで、自分のコミュニケーションに自信をもつことができる。

謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方々のご支援をいただきました。本研究のためにご意見をくださったみなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、夢中になって学習に取り組んでいた子供達にも、心から感謝いたします。

引用文献

- ・池田 真. (2016) 『CLIL (内容言語統合型学習) : 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第3巻 授業と教材』上智大学出版。
- ・柏木 賀津子. 伊藤 由紀子. (2020) 『小・中学校で取り組む はじめてのCLIL 授業づくり』大修館書店
- ・大森有希子他 (2020) 『岩手大学学部 GP 教育実践研究論文集』一第7巻, 52-56
- ・大森 有希子 他(2020). 「第11節外国語科・外国語活動」『岩手大学教育学部附属小学校研究紀要第34集』, 76-82